

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ

綾歌の古墳をめぐる

講師

近藤 武司 さん

(丸亀市文化観光課文化振興担当長)

共催

高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

平成29年5月28日(日)

行程表・目次

受付 栗熊コミュニティセンター

出発 丸亀市綾歌総合文化会館（総合会館アイレックス）北駐車場

①	佐古川遺跡	縄文晩期～中世 集落跡（アイレックス南駐車場）	1ページ
②	石塚山古墳群	弥生～古墳 墳墓（綾歌神社）	2ページ
③	金毘羅街道	高松道	3ページ
④	金毘羅街道	住吉の道標	4ページ
⑤	円福寺跡		5ページ
⑥	地藏尊		5ページ
⑦	快天山古墳	古墳前期 墳墓	6ページ
⑧	横山経塚古墳群・横峰古墳群・陣の丸古墳群	古墳前期 墳墓	9ページ
⑨	住吉神社		11ページ
⑩	渡池		12ページ
⑪	佐古川・窪田遺跡	弥生前期～中期 墳墓（R32佐古川交差点）	12ページ

1

佐古川遺跡

さがわいせき

丸亀市綾歌町南部の高見峰（たかみぼう）や猫山（ねこやま）の麓から北方に延びる丘陵先端部付近に広がる集落跡です。丸亀平野の東南端にあたるこの場所は、西側から北側に大東川水系の猫谷川、中大東川が流れており、西部や北部と分断される立地となります。

平成八年一月から実施された発掘調査によって溝跡数条、建物跡数棟及び窯跡一基が発見されました。各遺構の所属する時代は様々で、縄文時代晩期から中世まで継続して造営された複合遺跡です。

【縄文時代晩期】 中央に炉を有する掘立柱建物跡一棟と甕などの土器が多量に出土。当時は、この建物以北が流域となるため、南部に集落が展開していたと考えられます。

【弥生時代前期】 土器片を多く包含する溝跡が確認されたが建物遺構は発見されませんでした。弥生時代後期から終末期にかけて大規模造成が行われたことによるものと考えられます。

【弥生時代後期～古墳時代前期】 最も遺構密度が濃い。先に行われた大規模造成によって地盤が

安定したことにより定住化が進んだものと考えられます。多量の土器片で埋め尽くされた溝跡や掘立柱建物跡が発見されました。肩幅四メートルを超す大型の溝は、環濠としての役割があったものと考えられます。

【古墳時代】 竪穴建物跡数棟を発見。素焼き窯跡を併設するものも確認。木板の加工技術に優れていたようで、コの字に加工された樋状の加工品が出土。

いずれの時代も、集落本体は南部に展開しているものと考えられます。

また、南には平尾墳墓群、東には石塚山古墳群といった弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて築造された墳墓群が所在することから、それらに関連する集落と考えられます。



佐古川遺跡全景

2 石塚山古墳群

いしづかやま



佐古川遺跡：弥生時代後期の環濠

南部連山から北部に派生する丘陵先端部に所在する墳墓群。西側には縄文時代晩期から中世にかけて営まれてきた大集落である佐古川遺跡が展開し、北には弥生時代前期から中期にかけて築造された大周溝墓群である佐古川・窪田遺跡が広がり

ます。

石塚山古墳群は、丘陵上に築かれた五基の墳墓で構成されます。この内、一基は円墳と考えられています但未調査で詳細は不明です。残りの四基については、発掘調査が行われており、詳細は次のとおりです。

【第一号】前方後方墳

古墳時代前期前葉以降の築造で、竪穴式石室と箱式石棺の二基の主体部を有する。出土遺物は無い。

【第二号】円墳

古墳時代前期初頭～前葉の築造で、四基の主体部を有する。第一号主体部は、竪穴式石室で鉄剣二本が出土。第二号主体部は、形式不明。第三号主体部は壺棺。第四号主体部は、配石土壇。二～三号から遺物の出土は無い。墳丘から土師器片が出土した。

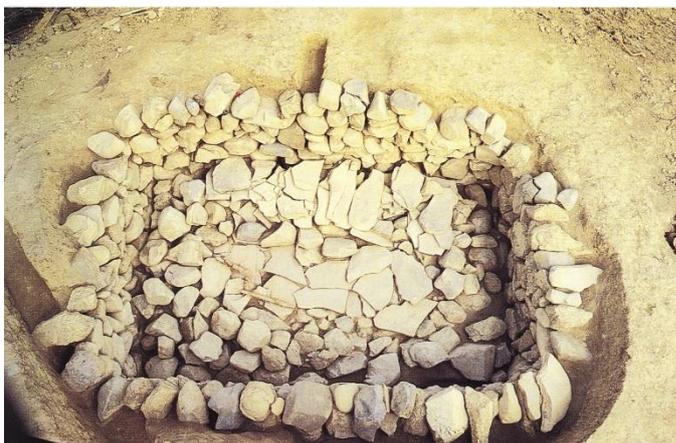
【第三号】前方後円形墳丘墓

弥生時代終末期～古墳時代初頭の築造で、三基の主体部を有する。第一号主体部は、竪穴式石室で鉄片が出土した。第二号主体部は、竪穴式石室で出土遺物は無い。第三号主体部は、土壇墓で土器片が出土した。墳丘から弥生土器片が微量に出土しており、新しい遺物が含まれない

ことから墳丘墓であると推測される。

【第四号】方形墳丘墓

弥生後期後葉以前の築造で、土墳墓一基が確認された。刀子が出土。



→ 石塚山古墳群
第二号墳 竪穴式石室の
基礎構造



← 石塚山古墳群
第三号墳の竪穴式石室

3 金毘羅街道 高松道

こんぴらかいどう

自由に他国（他県）に行くことが禁止されていた江戸時代、人々にとつて象頭山金毘羅大権現（現在の金刀比羅宮）などの神社やお寺に詣ることだけが幕府から許された大きな楽しみでした。

金毘羅参詣のために、特によく利用されたのが五街道（丸亀街道・多度津街道・土佐伊予街道・阿波街道・高松街道）です。綾歌町内には、高松街道が東西に通っています。この街道は、城下町高松の常磐橋（三越デパートの玄関辺り）を出発し、岡本↓滝宮↓綾歌町内↓榎井↓金毘羅へと続いています。街道には旅人が迷わないように、道標が設けられたり、道を明るく照らす燈籠も数多く立てられました。

羽床から山裾沿いに町内に入った旅人は御茶園の茶堂で一息入れることになりました。茶堂には、今は住吉神社の境内に移築されている安政三年（一八五六）に建てられた灯籠があり、人々にお茶の接待をしていました。茶堂をあとに、香川郡山崎村の久利氏が建立した地蔵を横目に丘陵を下ると、地蔵を浮彫りにした道標「右丸亀・左金毘羅」が立っています。

栗熊の馬指には、藩主が休憩する御殿や馬を乗り換える馬継所が設けられ、人夫が必要な時は裏の城山に登りホラ貝を吹いて集めたと言われています。

慶応四年（一八六八）に建てられた一丁地灯籠をすぎ、中大束川を渡ると、難所の専立寺坂が待ちかまえています。坂を下って少し進むと、藩主が大変気に入った饅頭（まんじゅう）屋があった天満の集落に出ます。ここにある地蔵も久利氏の建立によるものです。「駒止地蔵」のある一本木や大きな自然石の灯籠のある宿母には宿屋もあって、周辺には、酒屋・饅頭屋・醤油屋・うどん屋・餅屋・提灯屋・豆腐屋などが建ち並び大変賑わったようです。

天神の集落を抜けると、ここからの道は二つのルートに分かれます。通称「廻り池」を廻るコースと明治四十二年（一九〇九）に道が開通し「金毘羅・大川道・明治四十三」の道標がある市地の集落を通るコースです。道はやがて赤坂で合流し、「右高松・左琴平」「丸可免（まるがめ）道三里」の道標を過ぎ、二つの灯籠を見ながら坂を上ると延命寺の茶堂が見えてきます。

4 金毘羅街道

すみよし みちしるべ
住吉の道標

栗熊東・住吉（旧高添集落）の住吉神社神事場のすぐ南側を金毘羅（こんぴら）街道が通っています。

この辺りは、国道三十二号と離れているため旧態をよく残しているところです。

ここで、東から来た道が左右二つに分かれます。その分岐点に、地蔵が浮き彫りにされた道標が建てられています。

地蔵の下面中央に「先祖代々為菩提之」、その右に「右丸亀」、左に「左金毘羅」と彫り込まれています。右へ行けば、飯山町上法軍寺を通って丸亀へ、左へ行けば、金刀比羅宮へ行くことができます。と案内しています。

住吉の道標



「道標（みちしるべ）」とは、街道を往来する人が道程を知るため、あるいは道に迷わないための目印として作られるものです。

素朴なものとしては、道中の要所要所に柴（しば）を供え、道の守護神に祈願する信仰がありました。近世になって街道が整備されてくると、一里塚が築かれ、そこに樹木が植えられました。樹木の種類は、榎（えのき）・松・椋（むく）・梅壇（せんだん）などが多かったようです。

讃岐では、八十八か所の遍路、金毘羅参詣が盛んになるにつれて、石造のものが多くなり、「従是〇〇〇」とか「〇〇寺〇〇丁」などと刻まれた道標や丁石、「金毘羅大権現」と彫られた金毘羅灯籠や地藏などが多く残っています。山口県の中務茂兵衛のように、四国遍路を二百八十回行い、県内で六十八基の道標を建てた人もいます。

住吉の道標も、先祖代々の冥福（めいふく）を祈る心から建てられたものです。

5 円福寺跡

えんぷくじ

宝地山仁寿院円福寺と称し、京都の真言宗大覚寺末寺である。醍醐天皇御宇、聖宝僧正（理源大

師）の建立とされていますが立証するものはありません。明治時代の初めごろに廃寺になりました。本尊は、木造十一面観音菩薩、千体地藏、阿弥陀如来、両宝童子、不動明王、弘法大師御影と伝えられています。

また、歴代住職の内、正徳（一七一―一六一）以降の墓が数か所に分けて残されています。

護摩堂は、現在の住吉神社境内に移転され、神庫として再利用されています。この護摩堂の鬼瓦の裏には「元禄五（一六九二）年、四六代円福寺住快慧（かいけい）」と記されています。

富熊の吉祥寺にある十一面観音厨子の棟札にも「四十六代住持法印快慧（かいけい） 奉秋五十才 元禄十二（一六九九）年十二月十八日」と記されていることから、円福寺に関連するものと考えられ、円福寺の本尊であった十一面観音菩薩が吉祥寺に移った可能性も十分に考えられます。

6 地藏尊

元々は、現在地から約八十メートル東の宮池北堤の西橋付近に配置されていたものを整備に併せて現地に移転しました。

以前は、金毘羅参詣で高松道を往来する人々を接待する茶堂があり、そこで人々を見守っていたようです。

付近では、弘法大師が唐から持ち帰ったお茶の種が蒔かれ育てられ、「弘法茶」として重宝されました。このことから、この付近は「御茶園」との地名が残っています。

住吉神社の登り口に建っている金毘羅燈籠は、御茶園茶堂の横に建っていたもので、明治初年（一八六八）に現地に移されました。

現在、住吉公民館に茶釜が保存されています。



地蔵尊



御茶園茶道の茶釜

7

快天山古墳 かいてんやま

（国史跡 平成十六年九月三十日指定）

綾歌町富熊の北東端で坂出市府中と境を供する横山（よこやま）山麓から南に向かって派生する丘陵を辿ると、富熊字畑田と栗熊東字若狭の境界部で丘陵の南先端部になります。平野から見ると少

し高まりを持っており、そこに快天山古墳が築かれています。

快天山古墳は、今から約一七〇〇年前（古墳時代前期前半）に築造された前方後円墳（ぜんぽうこうえんぶん）です。快天山古墳は、同時期までに造られている前方後円墳としては四国で最大の大きさを誇っています。



快天山古墳

古墳の築造文化は畿内（きない）で発展していますが、讃岐ではそれに影響されず独自の築造様式が構築されています。その中で特徴を顕著に示す様式は、畿内では墳丘主軸を方位に合わせて築造するのに対して、地形に合わせて尾根の主軸と合致するように築いていることです。

また、畿内では埋葬施設を墳丘同様に南北主軸にするのに対し、墳丘主軸に斜行し東西主軸になっていることも讃岐の古墳にしか見られない様式です。

このような環境の中で快天山古墳が築造されていますが、快天山古墳はそれまでに築かれてきた讃岐型の前方後円墳とは大きく様相を異にしています。

外見で特に目をひくのがその大きさです。これまでにこの地域で築かれてきた前方後円墳とは比較にならない巨大なものです。百メートル近い前方後円墳を丘陵上に築くためには新しい土木技術が必要となります。快天山古墳の築造の際に採用された手法は、段築（だんちく）と盛土（もりど）でした。丘陵先端部に立地するために地盤が平野に向かって傾斜しています。これを段築によって平野側にある後円部を前方部のレベルに近づけるこ

とが可能になります。

更に、前方部側のほとんどが地山を削り出して整形されているのに対して後円部側では大規模な盛土によってその形状が生み出されています。この盛土は、数種類の土質のものを組み合わせながら水平に積み上げられています。中には土壌改良を行った土も多用されており非常に堅緻(けんち)なものとなっています。

また、この段築は前方部が三段、後円部は三段かそれ以上であることがわかっています。各段の斜面部には葺石(ふきいし)が施(ほどこ)されています。しかし、畿内の古墳に見られるものとは違って斜面に敷き並べられているだけの簡易なものであることや部位によって使われている石材や積み方違ったりしていることから、葺石が採用された初期段階のもので技術力が不足していたことが読み取れます。

各段のテラス面および墳頂には、畿内の古墳のように数珠なりに並べられるものではありませんが、三〜四メートル間隔で円筒埴輪(えんとう)はにわ)が立て並べられていました。また、壺形(つぼがた)埴輪も見つかっていることから円筒埴輪と組み合わせて並べられていたと考えられます。

現在、快天山古墳の後円部墳頂には卵塔(らんとう)や五輪石(ごりんせき)などが建っています。その中には、住吉(すみよし)神社の西南約百メートル付近のところにあつた真言宗(しんごんしゅう)円福寺(えんぷくじ)の僧権大僧都法印快天(そうごんだいそうずほういんかいてん)の卵塔があり、これが古墳名称の由来にもなっています。その卵塔の周りには、以前快天山古墳の主体部が顔を出していました。

快天山古墳には、三基の埋葬施設があります。その内一、二号は竪穴式(たてあなしき)石槨(せつかく)で三号は粘土槨(ねんどかく)です。いずれも棺(かん)には、国分寺町鷺ノ山(わしのやま)産の変朽安山岩(へんきゅうあんざんがん)でつくられた刳拔式割竹形石槨(くみぬきしきわりたけがたせつかん)が用いられています。これらの埋葬施設の主軸は、讃岐型の東西でなく南北主軸となっており墳丘の主軸とあわせてみると、快天山古墳は極めて異質な築造形態で、畿内と讃岐の両特徴を取り入れた折衷型であることがわかります。

三基の埋葬施設の配列状況をみると、一、二号は後円部の中心点を挟み対照的に配置されており当初から計画的に配列されたものと考えられます。

また三号も一、二号の中間からわずかに北方に寄ったところに設置されており同族者の墓と考えられます。昭和二十五年の発掘調査によつて、石棺内の頭部部分は床面より七〇八センチ高く造られており、精巧な造り付けの石枕が彫り出されていることがわかりました。

畿内の大型前方後円墳からは割竹形石棺が出土していないことから考えても、割竹形木棺（もつかん）の形態にもつとも近い二号石棺が日本最古のものであることがわかります。更に研究をするこゝによつて、二号からわずかに遅れて一号が造られ、その後三号が造られたこともわかりました。

国内で初めて快天山古墳に採用された刳拔式石棺は、中央でも認められ、県内の首長墓はもとより岡山や大阪の古墳にも採用されています。これは、讃岐に古くから石を使うという文化が確立していたことによつて石工の技術が磨かれていたこととの現われであると同時に、中央政権との強い関わりがあつたことを裏付けるものでもあります。

主体部からの出土品は、一号は盗掘を受けているようで荒らされていましたが、それぞれの石棺の内外から多数の副葬品（ふくそうひん）が出土しています。副葬品には後漢（ごかん）時代に中国で

作られた獸文縁方格規矩四神鏡（じゅうもんぶちほうかくきくしんききょう）も含まれていることから被葬者の権力の大きさをうかがい知ることができます。尚、二号からは中年女性、三号からは青年男性の人骨も出土したようです。

讃岐独自の前方後円墳築造文化の中に、他に先駆けて畿内の築造様式を取り入れることのできた快天山古墳は、被葬者の大きな政治力によるものと考えられます。

また、石棺に代表される快天山古墳の築造様式が中央の古墳文化に大きな影響を与えていることから、快天山古墳は、香川県のみならず四国・瀬戸内地域の古墳文化や、奈良盆地を中心とした畿内政権との関係を考える上で極めて貴重な古墳であるといえます。

8 横山経塚古墳群、横峰古墳群、

陣の丸古墳群

（県史跡 昭和四十八年五月十二日指定）

丸亀市綾歌町東部で、綾川町と境界を共にする丘陵上に点在する古墳群。

横山経塚古墳群と横峰古墳群は、讃岐型古墳の特徴を備える積石塚古墳で、高松市の石清尾山古墳群と共に積石塚群として有名です。横山から竜王山の間丘陵上に前方後円墳や円墳が点在しています。

いずれの古墳も本体は大きく崩れている部分があり、盗掘されていることがうかがえます。発掘調査はされておらず詳細は不明ですが、古墳時代前期前半の築造と考えられます。

付近の山中では、至る所で安山岩片が露出しており、古墳築造の際にも容易に石材を集めることができたかと推測されています。

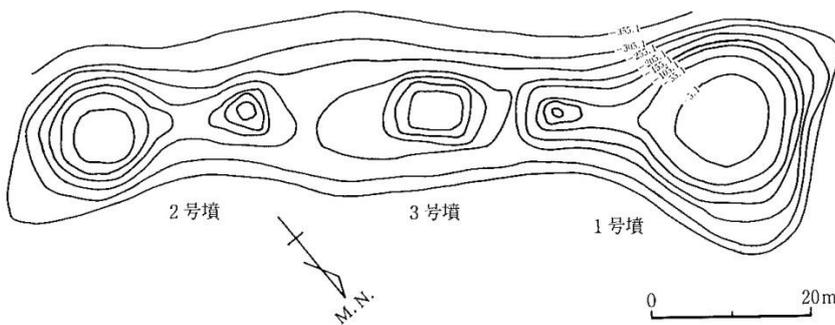
墳丘形状は、前方後円墳と円墳が確認されています。規模は墳長九メートルから四十二メートルと様々です。

陣の丸古墳群は、通称「陣の丸」と呼ばれる高原状の独立丘陵上に位置する古墳群です。延長百メートルほどの丘陵上に二基の前方後円墳が間に方墳を挟んで向き合うという類を見ない配列となつています。発掘調査は実施されていません。

いずれの古墳も、古墳時代前期の中でも早い段階に築かれたもので、讃岐の古墳出現期を考えるうえで特に貴重な古墳です。



陣の丸古墳群：第2号古墳 →



← 陣の丸古墳群：測量図

陣の丸古墳略測図



横山経塚古墳群：第4号古墳

9 住吉神社

祭神は、うわつつのおのみこと 表筒男命、なかつつのおのみこと 中筒男命、そこつつのおのみこと 底筒男命。

合祀祭神は、すさのおのみこと 須佐之男命。

創祀は、貞観年間（八五九〜八七七）。当時、この地には大きな池があり、大樹が茂り、その下に小祠が鎮座していました。応永年間（一三九四〜

一四二八）、綾川の堤防が決壊し、氾濫に伴う洪水で民家が漂流してきました。人々は流される屋上から、小祠を一心に拝み、身の安全を祈願しました。すると、一群の白鷺が社から飛び出て、東をさして水面を渡り飛び去りました。すると、満々と溢れていた水が一瞬のうちに流れ去り、九死に一生を得たとの言い伝えがあります。そこで里人は社殿を造り、氏神として尊崇するようになりました。この伝えから、この池を渡池と称するようになりました。

住吉神社は、天正年間（一五七三〜九二）に兵火にかかり一時衰えました。

現在、境内にある神庫は、元々百メートルほど西にあった円福寺の護摩堂です。

住吉神社



10

渡池わたり

高松市歴史資料館所蔵「讃岐国絵図」（寛永十（一六三三）年にも描かれている大きなため池です。

かつて、綾川は堤山（つつまやま）の裾を通り、丸亀平野に流れていましたが、現在の流域となり坂出に注ぐと、巨大な池が築かれたようです。

渡池は、江戸時代の中ごろに干拓され、約四十ヘクタールの水田へと変わりましたが、堤は残されているため、当時の様子をうかがい知ることができます。

11

佐古川・窪田遺跡さこがわ くぼた

南部連山から北部に派生する丘陵先端部の裾に所在する周溝墓群。南西側には縄文時代晩期から中世にかけて営まれてきた大集落である佐古川遺跡が展開し、南の丘陵上には弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて築造された石塚山古墳群が所在します。

弥生時代前期から中期にかけて築造された円形周溝墓及び方形周溝墓の群集が見られます。周溝

を共有して計画的に築かれた周溝墓は、いくつもの周溝墓がまとまりを持ち、複数のグループに区分されることから、集落単位で墓域の中での区画割をしていたことがうかがえます。

国道三十二号バイパス建設に伴う発掘調査で確認されたのは約四十基ですが、これだけまとまった周溝墓群が発見されるのは全国的にも珍しいものです。

各周溝墓は、中央に主体部を配置しており、竪穴式の土壙に組合木棺が組み込まれていたことが分かっています。

5月28日（日）復路

◆ことでん琴平線

（羽床駅）

（高松駅）

12:29発 → 13:13 着

次回のふるさと探訪は…



テーマ 無形文化財水任流泳法見学と史跡を訪ねる（予定）

とき 平成29年7月2日（日）

9:30～12:00頃

集合場所 玉藻公園西門付近（大的場海岸解散）

講師 福家 恵美子(水任流保存会師範)

穴吹 一雄(水任流保存会事務局長)

参加費 無料

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」6月15日号に開催案内を掲載しますので、御覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、

文化財課（TEL839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。

（電話が通じない場合は、「実施」です。）

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気を
つけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。

